2019年度

地球環境『自然学』講座

第１回

テーマ

最終年度自然学講座のねらい

「確かな未来の原点」

講　師

京都大学名誉教授

舞根森里海研究所　所長

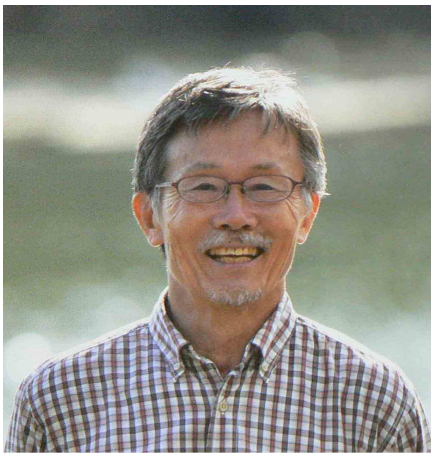
田中　克 先生

2019年４月 13日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

田中　克（たなか　まさる）



「略歴」

1962 年 3 月　滋賀県立膳所高等学校卒業
1966 年 3 月　京都大学農学部水産学科卒業
1973 年 3 月　京都大学農学部博士後期課程水産学専攻退学
1974 年 5 月　水産庁西海区水産研究所（長崎）　海洋部研究員
1982 年 7 月　京都大学農学部水産学科　助教授
1993 年 4 月　京都大学農学部水産学科　教授
2001 年 4 月　京都大学大学院農学研究科　評議員
2003 年 4 月　京都大学フィールド科学教育研究センター長
2007 年 3 月　京都大学定年退職
2007 年 4 月　NPO 法人ものづくり生命文明機構　理事（現任）
2007 年 8 月　マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所　客員教授（2010 年 7 月まで）
2009 年 6 月　NPO 法人森は海の恋人（気仙沼）　理事（現任）
2010 年 7 月　財団法人国際高等研究所（京都）　フェロー（2015 年 3 月まで）
2011 年 9 月　文部科学省東北マリンサイエンス拠点形成事業主査（2016 年 3 月まで）
2013 年 4 月　NPO 法人 SPERA 森里海・時代を拓く（柳川）　理事（現任）
2014 年 4 月　舞根森里海研究所長（現任）
2015 年 4 月　認定 NPO 法人アースウオッチ・ジャパン SAC 委員（現任）
2016 年 4 月　地球システム・倫理学会理事（現任）
2016 年 9 月　環境省つなげよう支えよう森里川海プロジェクト絵本作成委員会委員(2018 年 3 月)
2018 年 4 月　一般社団法人全国日本学士会理事（現任）
2018 年 8 月　社団法人野尻高原大学村理事（現任）

「現在進行中の各種委員など」
奈良県東アジアサマースクール講師（2012 年度～）
滋賀県マザーレイク 21 計画学術フォーラム委員（2013 年度～）
認定 NPO 法人アースウオッチ・ジャパン科学委員会委員（2014 年度～）
京都市環境保全協議会評議員（2015 年度～）

総合地球環境学研究所研究プロジェクト外部評価委員会委員（2016 年度～）
「大学での講義など」
日本文理大学「森里海連環学」非常勤講師（2009 年～）
福井県立大学生物資源学部「山川里海連関学」非常勤講師（2010 年～）
京都大学森里海連環学ユニット提供「森里海連環学」非常勤講師（2013 年～）
島根県立津和野高校「森里海連環学講座」講師（2017 年～）
「主な著書」
魚類学（下）（共著）　恒星社厚生閣、1998
森里海連環学への道　旬報社、2008
稚魚学－多様な生理生態を探る（共編）　生物研究社、2008
稚魚－生残と変態の生理生態学（共編）　京都大学学術出版会、2009
干潟の海に生きる魚たち－有明海の豊かさと危機（共著）　東海大学出版会、2009
水産の 21 世紀－海から拓く食料自給（共編）　京都大学学術出版会、2010
増補改訂森里海連環学－森から海までの総合管理を目指して（共著）　京都大学学術出版会、2011
森と海を結ぶ川－沿岸域再生のために（共著）　京都大学学術出版会、2012
森里海連環による有明海再生－心に森を育む（共編）　花乱社、2014
防災と復興の知-3・11 以後を生きる（共著）　大学出版部協会、2014
大槌発 未来のグランドデザイン－震災復興と地域の自然・文化　昭和堂、2016
いのちのふるさと海と生きる（編）　花乱社、2017
女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来（共編）　昭和堂、2017
生命文明の時代（共著）　雄山閣、2019

地球環境自然学講座 講演要旨 20190413

最終年度の講座の狙い　確かな未来の原点を探る

１．なぜ“確かな未来の原点を探る”か？

（１）確かな未来の原点を探る

いまや確かな未来（孫世代の幸せな未来）を展望できない時代に至っている。今一度もの事の原点を見つめなおす必要があるのではないか。分断・対立・排除・離脱・無視など深刻な事態が世界と日本を覆い始め、ヒトは絶滅への道を加速度的に走り出している。“サル化する人間社会”に歯止めをかけ、家族と共同体を大事にした社会に戻すことはできるのか。

（２）分断・対立・排除と対極の世界

分断や対立の世界の対極にあるのはつながりの世界である。森と海の水の循環をベースにした不可分のつながりを、里に暮らす人々（私たち自身）の価値観を自然に寄り添う方向に変え、再生・再構築することを目標にした「森里海連環学」の深化が求められる。自然と自然、自然と人、人と人のつながりを紡ぎなおす必要性がますます高まっている。

（３）平成の 30 年は何であったか（１）

作家の高村薫さんは、平成の 30 年を「一億総すくみ」の時代と称した。問題はどんどん噴出し深刻化する中で、われ関せずと見てみない振りをし続け、政治の貧困化と暴走を招いてしまった。縮小化社会の中で、2019 年度の国家予算は借金をさらに膨らませて 100 兆円を越えた。原発の恩恵を受ける今を生きる私達、膨大な経費を使って廃炉の責任を負わされる未来世代。令和の時代は「一億総すくみ」状態から、未来世代の幸せ優先の時代に転換できるか。

（４）平成の 30 年は何であったか（２）

平成元年に始まった森は海の恋人運動は、2011 年 3 月の東日本大震災を乗り越え、日本全国はもとより世界が注目する存在になった。それはまさに分断・対立の世界と対極のつながりの世界の創生だからだといえる。この間宮城県気仙沼の漁師を支えて植樹祭を継続してきた岩手県一関市室根町第 12 自治会では、中心メンバーが高齢化で存続が懸念されたが、多くのシニア層は「植樹祭がなくなったら、わしらは生きていけない」と言い、ここなら心心豊かに暮らせるとＩターン・Ｕターンしてきたと若者世代による祭りの継承が進んでいる。

2.「森里海のつながりーいのちの循環」の目指す未来

（1）森里海のつながりーいのちの循環

2015 年度から 2019 年度の 5 年間の基本テーマ「森里海のつながりーいのちの循環」は、森と海の間を悠久の時を通じていのちの源「水」は巡ることの大切さを問う。この基本テーマの中に含まれる「森」・「里」・「海」・「つながり」・「いのち」・「循環」は原点を見つめなおし、自然とともに生きる確かな未来を拓き続く、世代の笑顔最優先の社会を造る鉤をにぎる。

（2）いのちの循環のカギ物質は水

命は水の中から生まれ、水は全ての生き物の命に必須の物質である。人間が日々食べる全ての食物は他の生き物の命を育み、悠久の時を通じて海と陸の間を巡り続ける。人は地球生命系の基盤を支える存在としての森（森林生態系）を大切に考える。その森が存在し続けるのは海から蒸発した水蒸気は雲となり、雨や雪となって陸域に降り注ぎ、森を育む。森にとっての「原点」は海である。人間の遠い祖先は魚であり、魚は海に生まれた。人間の「原点」も海である。

３．問われる社会の循環：森暮らしの勧め

（1）人間社会に問われる都市圏と地方の循環

人はいのちの源である水のある場所として川の流域や、いくつもの川が集まって形成される扇状地には大都市圏が形成される。大都市圏に集中した人間の活動（産業・生活）を支えるエネルギーと食料を供給するのは地方。都市圏と地方の循環は持続可能社会の根幹であり、地方創生が声高に叫ばれる。都市が地方を支える「霞が関的発想」ではなく、地方がないと都市は生きられないのが現実であり、発想の転換が求められる。

（2）都市と地方を結ぶー２居住地暮らしの勧め

養老孟司さんは「現代版参勤交代論」を提唱し、霞ヶ関の役人は交代で地方暮らしをすることを提唱。昨年 4 月に閣議決定された「第 5 次環境基本計画」には、森里川海がつながった社会の軸に、都市圏と地方の循環・共生を明示している。長野県信濃町の「野尻高原大学村」の森の中では、酷暑の盛夏でもクーラーなしで暮らせる。資源・エネルギーの節約と心身の健全化の同時的実現を可能にする森暮らしの勧め。

4. 確かな未来の原点を探る：先住民の文化、先人の知恵に学ぶ

（1）先住民の暮らしと文化に学ぶ

地球の人口は今から 1 万年前には 700 万人、狩猟と採取によって暮らしてい

た。その先住民と呼ばれる人々はいまや 70 万人に激減。現在の大量生産・大量消費・大量廃棄の物質文明の限界を見極め、先住民の暮らしや文化に学びなおすことが必要。自然学講座の海外観察会では、ニュージーランドマオリの自然観（2016 年)、ウスリータイガに狩猟と漁労に生きる先住民ウデヘの暮らしと文化（2017 年)、パラオの自然と文化（2019 年）に多くのことを学んだ。

（２）先人の知恵に学ぶ

古くは 1300 年前の古文書にそのことを示唆する記述がある「魚つき林」は、海辺の森を保全すると海辺には生き物たちが育まれ、漁業が持続できるとの先人の知恵。その関係を源流域から流域全体の森が日本周辺の海の関係にまでスケールアップしたのが森は海の恋人。さらに、日本全体の森と日本周辺全域の海の関係を、大陸の森林と外洋までの関係に拡大した「巨大魚つき林」として地球レベルに普遍化。

（３）東日本大震災に学ぶ

東日本大震災は千年に一度の未曽有の被害をもたらし、いまなお本来の復興は実現しない事態が続いている。同時に未来につながる多くの教訓も生み出しつつある。とりわけ陸と海の境界に巨大なコンクリートの壁（防潮堤）を築き、力で自然を抑え込もうとした施策の中で、気仙沼舞根地区ではいち早く高台移転を決め、宮城県では唯一つ、防潮堤計画を撤回させた。岩手県大槌町赤浜地区では「人間の造った物は必ず潰れる」と民意を集め、14.5mの防潮堤建設を阻止した。三陸には海辺の町が津波に被災すると、山手の町は直ちに救援に出動する「後方支援」の文化が根付いている。東日本大震災の負の復興過程に学び、南海トラフ地震・津波に備えた「事前復興」の取組が進められている。

5. 生命文明の時代

（１）量から質へ、結果より過程、間を大事にする社会を

20 世紀後半からの高度経済成長最優先、そのためのグローバル金融資本主義は世界を席巻し、さまざまな地球的課題を生み出した。「量」に重きを置き「質」を軽視してきた半世紀、急いで結果ばかりを求め、物事の過程を軽視あるいは無視してきた半世紀。森里海連環学は、森と海の「間」を重視し、失いつつある“縁の下の力持ち”の復権を目指す。東日本大震災の復興過程では物理的な「命」ばかりが重視され、心の豊かさに見られる「いのち」は軽視された。量より質を、結果より過程や間を重視する社会とはどのようなものであろうか。物やお金より「いのち」が大事にされる社会に違いない。

（2）「環境・生命文明」社会への展望

今世紀初めから、環境、経済、文明（社会）の対立を乗り越えた先に確かな未来があると、多様な分野の人々が議論を重ね、実践を積み重ね、大量生産・大量消費・大量廃棄の「物質文明」の先に実現すべきは全ての命が大切にされる「生命文明」社会と構想されてきた。そうした流れは環境省の第５次環境基本計画（2018 年 4 月閣議決定）の中に、2050 年を目標に「環境・生命文明」への移行として明記された。そうした流れは地方では先行的に進められ、兵庫県豊岡市の「コウノトリの郷づくり」として国内外から大きく注目されている。

本年度の講座は、このような“つながりの価値観”に根差した社会を再生させるために、今一度「原点」に戻り、今を見つめ直し、続く世代の幸せにつながる道を探るものである。